

12 月第 4 週の礼拝説教

- 日 時：2024 年 12 月 22 日（日）10：30～11：30 クリスマス礼拝
- 説 教： 保科けい子牧師
- 聖 書：新約：マタイによる福音書 1 章 18～23 節（新約 P1～2）
- 説教題：「 神は我々と共におられる 」
- 讃美歌：261（もろびとこぞりて）
271（喜びはむねに 満ちあふれる）

毎週 1 本ずつ待ち望みながら灯してきた蠟燭の火が、4 本になりました。それぞれの蠟燭の長さの違いは、私たちが主イエスの御降誕を待ち望んで礼拝をささげて来た時の長さを現しています。そして、本日は 4 本灯った蠟燭の光を見つめながら、今年もこうしてクリスマス礼拝をささげられますことを共に主なる神様に感謝したいと思います。

さて、本日の聖書箇所マタイによる福音書 1 章 18 節は「イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。」と始まります。マタイによる福音書は、書き出しの 1 章 1 節から 17 節で、イエス・キリストの系図を記しています。よく語られることですが、初めて教会に行ってこれから聖書を読んで見ようと思った時、あるいは、もう少し教会や礼拝に馴染んできて「求道者会」と呼ばれる集会に出るようになった時に、「まず新約聖書を読んでごらんなさい」などと勧められて聖書を手にとった時、最初に開くのは 1 ページのマタイによる福音書 1 章でしょう。すると、1 節に「アブラハムの子ダビデの子、イエス・キリストの系図。」とあり、17 節までカタカナで人の名前らしきものが羅列されています。この段階で多くの人が聖書を閉じてしまうと言われています。しかし、そこで止めてしまわずにやっと本日の箇所の 18 節に進もうとすると、段落の見出しに「イエス・キリストの誕生」とあります。ですから、キリスト教の中心的な出来事であるイエス・キリストの誕生について書かれているのだらうと思い読み出すと、18 節で、「イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。」と記されています。婚約関係にあったカップルの間に、子どもが与えられるということです。現代ならば、あまり問題にされるようなことではなく読み過ごしてしまいそうな記事です。しかし、19 節を読むと、「夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。」とあるので、あまり好ましくない出来事が起こっているということが分かります。今の時代の事柄として考えるなら、婚約関係にある者たちの間に不倫関係が起こっており、その結果として女性の妊娠が明らかになっている、という事態が生じているのです。聖書と言うので、真剣に読んで見ようと思いついて読みだしたら、とんでもない書き出しだった、と読み続けることに二の足を踏んでしまうような内容になっています。

私たちが毎週の礼拝で告白している使徒信条において「主は聖霊によりてやどり、処女（おとめ）マリアより生まれ」と表現されている文言の内容、いわゆる聖霊による処女降誕の奇跡が本日の箇所にも語られているわけです。ルカによる福音書はこのことを母マリアの視点から語っていて、マリアに天使が現れていわゆる受胎告知をする場面になります。レオナルド・ダ・ヴィンチやフラ・アンジェリコによって、美しい絵画として描かれています。一方、本日の聖書箇所であるマタイによる福音書は、マリアの夫ヨセフの視点で語られています。淡々と書かれていますのですが、ヨセフにとってこのことはとても深刻な出来事であったでしょう。彼が婚約者マリアへの信頼を大きく損なってしまうような出来事でした。ヨセフは、マリアに裏切られたという思いをぬぐい去ることができなかつたでしょうから、新しい家庭を築こうとする前に二人の関係は崩れ去ろうとしていたのです。

ところで、少し前に戻りますが、18節は「イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。」と書き出されていることを先ほど確認いたしました。その「誕生」という言葉は、実は1章1節の「イエス・キリストの系図」の「系図」と同じ言葉であることが、今回初めて分かりました。今年のクリスマスの大きな発見でした。また、旧約聖書の最初に置かれている「創世記」のことを英語で「Genesis（ジェネシス）」と言いますが、それは、2章4節に語られている「これが天地創造の由来である。」の「由来」から来ています。それがマタイによる福音書1章の「系図」や「誕生」と同じ言葉だったのです。創世記は、主なる神のみ業によってこの世界が誕生し始まったことを語っています。そして、マタイによる福音書においても、最初に系図を位置させ、1章18節から主イエス・キリストの誕生によって神の救いのみ業が始まったことを語っているのです。ここに旧約聖書と新約聖書の深い繋がりを見ることができます。しかし現実には、夫ヨセフは正しい人であったがゆえに、実際にマリアの身に起こっていることを見て、マリアへの疑いを抱いたままで夫婦となることはできそうにもなく、彼女と縁を切ろうとしたのです。ヨセフが「マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した」というところに、彼の精一杯の優しさが見えています。20節に「このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った」とあります。「このように考えていると」という言葉に、彼がマリアとのことで深く苦しみ、悩んでいたことが示されています。そのように苦しんでいた彼のもとに、主の天使が夢に現れて語りかけたのです。天使は彼に、「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい」と言いました。そして、マリアの胎内の子は聖霊によって宿ったのだと告げ、「マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」と命じたのです。つまり、マリアはあなたを裏切ったのではなくて聖霊によって身ごもったのだ、だから安心して彼女を妻として迎え入れ、生まれてくる子どもをイエスと名づけなさい、

とお命じになったのです。イエスという名前は「神は救い」という意味です。マリアが生む子は、神の民を救う救い主となる、救い主に相応しいイエスという名前をあなたがその子につけなさい、と主はヨセフに命じたのです。そのようにして、ヨセフは人間の歴史の中で、とんでもない役割を担うことになりました。しかし、22節23節では、「このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。

『見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。

その名はインマヌエルと呼ばれる。』

この名は、『神は我々と共におられる』という意味である。」と記され、ヨセフの人生に神が介入してこられ、神が共にいてくださるといふことの素晴らしさを知ることになったことを記しています。それはクリスマスの出来事そのものです。またこのヨセフの決断によって、旧約聖書に語られていた救いの預言、イザヤ書第7章14節のインマヌエル預言が実現したのだとマタイによる福音書は語っています。ここに、神が共にいて下さるとはどういうことなのかが示されています。神が共にいて下さるとは、なんとなく一緒にいて支えて下さっているということではありません。主なる神は、ご自分の独り子の運命をヨセフの信仰の決断に委ねられたのです。そしてまた、そのようにして、現代の私たちと共にもおられるのです。